

3 講演録

「人生を支える一冊」

こどもの広場 代表 横山 眞佐子

みなさん、こんにちは。横山眞佐子です。

人の心というのは、案外真っ直ぐ向き合うとなかなか本心は言えないものです。でも、このパペット人形に向かってなら、「なんだおまえ、本当に変な格好しているね」、「ぼくさ」みたいに心の扉がちょっと開くことがあるんですね。特に子どもは、知らない大人と真っ直ぐ向き合って話すことは苦手です。でも、これを見ると急に「やあ、なんだろうこれ、ねえ、ぼくね」っていうふうに話せるようになるんです。



これは、アメリカなどでカウンセリングに使ったり、心が傷ついた子どもたちとコミュニケーションをとったりする時に使うパペット人形なんです。使い方一つで、人間の心はぱっと開き、言葉の一つでぱっと閉まるというのが、人間のコミュニケーションのすごいところだと私は思うんですね。

人と人は何か関係をもったときに、その関係が自分にとって心地よければドアが開きますが、警戒心を持った瞬間にその人に向かって違う言葉で話そうとします。これはすごい人間の技なんです。

その他にも、人と人が初めて出会ったときに、相手の人のことを考えますよね。さっき原口先生が紹介してくださった私のプロフィールを聞いて、「ああいう人かな、こういう人かな」って、想像されたと思います。この想像する力、これも技ですね。これがまたひとつ加わるわけです。

先日、下関にある作家さんが来られました。杉山亮さんという方です。ご存じの方はいますか。子どもの本を読んでいる方は知っていらっしゃるかもしれませんが。杉山亮さんは、東京に住んでらしたと思うんですけど、小淵沢に引っ越されたんです。杉山さんは、小淵沢に引っ越したら、すごく不思議なことに気づいたそうです。小淵沢の道路の縁には穴が掘ってあるんですって。ちょうど人が一人入れるぐらいの穴なんです。この穴はいったい何なんだろうと思っていたら、ちょうど小学生が集団登校をしていたんです。不思議なことにその集団登校では、6年生から1年生までみんなロープで、こういうふうに結んでいくんですって。変なことするなと思っていたら、先頭の6年生は、ピックルを持っている

んです。ご存じの通り、小淵沢は、日本アルプスの麓です。だから家にピッケルがあるの
でしょう。子どもたちは、ピッケルを持って登校してるんです。何をやってるんだろうと
思っていると、突風が吹いたんです。日本アルプスから、ぶあーっとその道筋に沿って
ものすごい突風が吹くと、小さな1年生はその突風に吹き上げられてしまうので、6年生が
ピッケルを地面にがっつきすんです。すると、みんな上がるんですけど風が止むと、ポト
ンポトンポトンと落ちてくるんです。そして、みんなピッケル抜いて登校するんです。す
ごいところだなと思っていたら、もっと不思議なことがあったんです。その穴は大人も大
変なときには中に入って、風が過ぎるのを待つんです。そのための穴が掘ってあるん
ですね。大したところだなと思っていたんですが、避暑地なのでいろんな人がやって来
るんです。夏の間は、いろんなお店屋さんが商売をします。夏が過ぎる頃、ある一軒の魚屋
さんの前に棒が立っていて、そこに鯛が干してあったんです。鯛って棒に刺すのか
って思っていたら、また突風がばあっと吹いて、その鯛がどんどんどん伸びてカマ
スぐらいの大きさになったんです。こっちのお店屋さんは用品店なんですけど、夏
の間に売れ残った半ズボンをやっぱり竿の先に刺しているんです。すると風が吹い
て、半ズボンがだんだん長くなって長ズボンになるんです。地元の人には、もち
ろん買いません。鯛も買いません。だって伸びちゃってカマスになった鯛なんてお
かしいでしょう。伸びちゃったズボンなんて繊維が伸びてるわけだから買いません。
でも町から来た人たちは、「おやっ安い7割引、買おう」って言って買って帰るん
です。

さあ、みなさん、今の話、全部嘘八百ですから…。でもね、みなさん、どこまで信じて
いましたか。子どもが穴を掘ってピッケルで…。そんな突風が吹くのかって思ったで
しょう。そうか、でも、あり得るかもしれませんね。6年生から1年生までって思っ
たでしょう。嘘です。あり得ませんよ、そんなこと。

でもね、みなさんたちいいですか。私が嘘八百を言葉で言いました。絵は見
ていませんよね。でもたぶん、心の中に子どもがこういうふうになっていく風景を
思い浮かべ、ポトンポトンポトンと落ちていく子どもを思い浮かべましたね。そ
れから、この鯛が、長くなる途中で「うそ」っと思いましたね。この絵を見た
とたんに、いやそれはちがう、ましてや半ズボンが長ズボンになるなんて…。
そして嘘に気づくんですけど、その最初のあたりの想像力とみなさんたちが
思い描いた絵、これこそが、私は人間の素晴らしい能力だと思
うんですよ。嘘を本当と信じるのは、ちょっとおいといて、想像力というの
は、目に見えないものを言葉で言われたときに、みなさんそれぞれが絵を
思い浮かべる力だと思うんです。その力を人間はもっているんですよ。みな
さんは素晴らしい、騙されて素晴らしい。

今の想像する力は素晴らしいです。「自分の中の子どもが、今も生きて
いるんだな」っと思って、自分がかわいがってください。今の想像が
できただけで、「いいやつだなあ、自分」っと思ってください。というの
は、子どもの世界は、ご存じの通り、現実と非現実を区分けして
いません。なぜなら、「むかしむかしあるところに、おじいさんとおばあさん

がいたのよ」、そう言うだけで子どもは「ふんふん、それで」ってなるわけです。だって、むかしむかしっていつかわかりませんよ。おじいさんとおばあさんって、今は、おじいさんとおばあさん同居していないことの方が多いわけです。でも、「ふんふんそれで」って、子どもは思うのです。そのおじいさんにはね、ものすごく大きな鼻がついていたの、鼻よ、その鼻は、あんまりにも大きくて、だれかが棒で持っていないと、ご飯を食べられないぐらいだったの。「へえ、どんな鼻かな？」このように想像するわけです。そして、そんなおじいさんがいるかもしれないと子どもは思うわけなんです。これが子どもの中の想像の深さというか広さなんです。でも大人になると、えーそれちょっと、芥川龍之介の『鼻』という話とよく似てるねと思ったりするわけです。ここで大人は、自分の知識をその中に入れて、本当か嘘かを判別しようとしています。でもね、子どもはそんな姑息なことはしません。ちゃんと物語の中にしゅっと入ってきてくれるのです。その想像力っていうのは、実は最初は言葉からなんです。今、みなさんは、半ズボンが伸びるという言葉聞いて、頭の中に絵を描きました。これは想像力です。想像というものは、言葉から絵に描けるということなんです。言葉から絵に描けると、例えば、顔があっちにもこっちにもあるような絵を描くピカソの絵を見て、私たちは人間のいろんな内面をこの人は一時に描こうとしたのかなと思いを巡らすこともできるわけです。すごいことですよ。子どもの時代に言葉で聞いたものを自分の中で想像して、絵に思い描くという能力をどうやってもっと高めていくか。それは本当に簡単なことです。本を読んであげる、お話を聞かせてあげる、そういうことだと思うんです。

さっき紹介していただいたように、私は大学を途中で辞めたんです。すぐに行動に移すタイプとは思ってないのですが、いたたまれない気持ちで…。私が入学した大学は、東京学芸大学という教員になる大学だったんです。そのころは学生運動が華やかで、たぶん原口先生も東大紛争の真っ只中に大学にいらしたと思うんですが、教員免許や卒業証書を誰がくれるのかと疑問に思ったわけです。今考えたら、馬鹿なことしたなと思うんですよ。そう思ったときに、もういいかそんなものはもらわなくて、私は自分で生きていくと決めて辞めてしまいました。じゃあ、どうするんだって…。仕事はもちろんないわけですし、資格もないわけです。しかもすぐに子どもが生まれ、二人も生まれ、ごたごたがあって、一人になり、子ども二人をどうやって食べさせていくか考えていたときに、本当にふと偶然、新聞に子どもの本屋を始めたという人の記事を見つけたんです。朝日新聞の「ひと」という欄に。それには吉祥寺で、たった5坪の小さなお店を始めたことが載っていたんです。その方も同じぐらいの年代だったんですね。一流のアパレルメーカーに勤めていたのを辞めて、ハッピーオールという名前の子どもの本屋を始めたんです。5坪と小さいので、土曜日曜には、前の道路に椅子とテーブルを出して、子どもたちに本を読んでやっているんです。なんて素晴らしいんだろう。いいなあ。私も子どもの本屋を開きたいなって思いました。でも見回しても子どもの本屋なんて、どこにもなかったです。調べていくと、その当時、全国に23軒しかありませんでした。ほとんどは、大都市。一番最初にできたのは、名古屋のメルヘンハウスでした。その後に東京にクレヨンハウス、それからメリーゴーランド。もうつぶれてしまいましたが、大阪に夕鶴というお店もありました。それらは全部、

都会にあったんですね。ハッピーオールももちろん都会でした。中国地区から九州地区にかけては、そんなものは一軒もありませんでした。普通それはちょっと無理じゃないのって思うんですけど、「やったあ一軒もないんだ、私が一番みたい」という考えで、「やるやる」と言っていたんですが、もちろんお金なんかありません。でもね、何で私は子どもの本屋の記事に惹かれてしまったのかということをよく考えてみたんです。私が好きなことは何なんだろうって…。

実は、私は**教育学部**だったんです。私が好きだったのは馬だったんですね。もちろん馬なんか乗ったことも触ったこともないですよ。でも将来は北海道の牧場へ行って馬を育てるということを夢のように考えて大学へ行きました。そしたら、大学には馬はいませんでした。いたのはヤギです。ヤギの乳搾り。それから畑でサツマイモを植える。田んぼの稲刈りをする。スズメを捕って焼き鳥にして食べるとか、そういう**教育学部**生活だったんです。私は、植物や生き物がとても好きでした。でも自分の生活の中にあっただけではないんです。私の家は農業でもなければ、商業でもなく、父親はただの会社員だったんです。自分の生活の中にあっただけの本だったんです。私の父は本当に本が好きで、家の中は本だらけでした。小さいときから父の本に囲まれて育ったみたいなものでした。父が本が好きなので、私にも本を買ってくれるわけですね。私がやっても絶対にしかられないのは、本屋に行ってつけて本を買うということだったんです。子どもの時に、「つけて本を買っていい、本は何を買ってもいい」と言われてました。しかし最後は父のところに請求書が行くわけですから、何を買ったかはお見通しなんですけど…。こっそり買ったみたいに思っているんですけど、つけにしてくださいといった瞬間にばれているんです。でも、その本にお金の糸目がついていなかったんです。私は、すごく病弱な子どもで、ありとあらゆる病気をして、小さいときに「もう助かりません、もう助かりません」と言われながら生き残ったんです。父も同じように病弱で、しょっちゅう喘息で休んでいました。親子二人で枕を並べて病室にいたんですね。することがないですよ。それで、父は自分の本を出して私に読むわけです。戦後間もない生まれの私ですから、子どもの本はほとんどありませんでした。ちょうど岩波書店から、この『ちいさいおうち』『スザンナのお人形』『おそばのくきはなぜあかい』という「岩波の子ども本」というシリーズが出始めたんです。石井桃子さんが、岩波書店の編集に入って、こういう本を出し始められた時だったんですね。父は、その本を私に買ってくれましたけど、まだ小さいので読めないわけですが、父はそれを読んでくれました。さらにこれと同時に、自分の大好きだった宮沢賢治の全集の中から、子どもでもわかりそうな童話を読んでくれるわけですが、絵なんかありませんでした。これは今は、絵本になっていますけど…。本には難しい漢字がいっぱい書いてあって、「何とかでせう」と書いてあるわけですね。それを父は「何とかでしょう」と読むわけですが、なぜ「せう」ではなく、「しょう」なのかなと思いつつもその文字に書かれている言葉と口に出す言葉が違うというのを自然に覚えるのです。ですから漢字が書いてあってもふりがながついてなくても、父の読んでいる前後をじっと見ながら、漢字が読めるようになっていったのです。お互いに病気がちだったことから、私は父にたくさん本を読んでもらっていました。わかるとかわからないとか全然かまわず、父は自分の好きな

ものを読んでいたと思います。宮沢賢治もそうでしたけれども、室生犀星も芥川龍之介の作品もありとあらゆるものを読んでくれていたんですね。たぶん子どもが退屈そうにすれば止め、面白そうだったらさらに読んでいたと思うんです。このような環境が本好きな私にしてくれたのだと思います。今もまだ父の本箱が残っています。その中には茶色く汚くなった本がたくさんありますが捨てられません。手刷りの版画の挿絵が入っていたりするんです。みなさんをご存じないですよ、本の裏を開けると、最後の後書きの奥付と言うところに作者の判、自分の赤いはんこを押した和紙が貼ってあるんです、一冊ずつ。そんな本はもう今はないですよ。そういう本が家にはたくさん残っているんです。何が良かったか、それは、本の面白さによって、父も私もお互い病気というマイナス要因を覆い被すだけのいい時間を過ごしたことだと思うんです。本が好きになったのは、そういうわけなんです。

さっきの話に戻りますが、自分に何かできることはないかと考えたら、本と関わることだと思ったんです。その時、新聞の「ひと」の欄に子どもの本屋を始めたとの記事が載っていたので、やってみたいと思ったんです。あれから38年間、とうとうお金に恵まれないうままにつぶれないだけましとやってやっています。でもね、本屋を始めたことによって、目に見えない面白さ



を私だけのものにしておかないで、誰かに手渡すことができるって思えるようになったんですね。わたしのそばにはいつも好きな本がある。「全部これ私の本だもんね」って、その本屋の本箱を見ながら…。「えっ、あなたそれ買っていくの？」って、私の好きな本に囲まれながら仕事をしています。それは、自分の中にある子ども時代のすごく良かったことを大人になった今も大事に持ち続けられたということだと思います。たぶん、みなさん一人一人の中に子どもがいますよね。マーブルチョコを食べたことがある人はいますか。パリッとかじると輪になっていて、中の味が違うんです。チョコレートが間に入っていたりしてね。私は、人間はマーブルチョコと同じだと思うんです。もしくは、らせん階段じゃないかと。ぐるぐるぐるってなっていて、自分は今、らせん階段のどこかにいる。覗くと一番下の一段目の階段にることがわかる。その一段目の階段が子どもの私、5段目のところが5歳の私、15段目が思春期の私というようにつながっているんです。当たり前なんですけど、時々忘れますよね。私は大人、あなたは子どもっていうふうに。忘れないでいると、自分のそばにいる子どもがよく見えてくるんです。

この時代の子どもたちを育てるのは、感性だと思うんですね。現実と非現実の間を行ったり来たりできる感性。想像する力を持つための感性。それが子ども時代に育てられるっ

ということだと思っんですね。それを生かして、将来、現実はどう立ち向かうのか？人間の未来にとって感受性を育てていくことが大事なことだと思っんです。子ども時代には、とにかくたくさん本を読んであげる。面白い本も冒険の本も難しい本も何でもいいと思っります。1歳から5歳までの人たちは、本当に何でもいい。何でもいいというよりも、何でもいい方がいいのです。一つのものに特化しないでいろんなタイプのものを読んでもらって、難しかろうが科学だろうが、図鑑のように細かい字がいっぱい書いてあろうが、そういうものを読んでもらったり、一緒に並んで見たりすることで、感性が育っていくのです。でも少し大きくなっていくと、子どもも現実に向き合わざるを得なくなりますよね。

子どもは幼稚園へ行くようになると友達ができますよね。「できます」って簡単に言っますが、本当は簡単じゃないんですよ。私は今から10年ぐらい前に、本屋の時と同じで、おもしろそうと幼稚園の園長を引き受けました。下関にある梅光学院が新しい学部、子ども学部、子ども未来学科を創設する時に、「よし、じゃ一緒にやってみよう」となって、2年ぐらい前から創設のための実行委員になったんです。子ども未来学科というのは、子どもの未来を考える学科です。それには教育や仕事からアプローチする様々な方法があるでしょう。例えば、ITから子どもの未来を考えた時に、どっちの方向に行った方がいいのか考えるのも子どもの未来、農業から子どもの未来を考えた時に、この農業を50年先どういうふうに展開していけばいいか考えるのも子どもの未来。そういう地域をどうやって創っていけばいいか。すべて総合した子ども未来学科っていうのを創りましようと言って、その学部ができたんです。その時にたまたま附属の幼稚園の園長先生が具合が悪くなられて、私はお調子者で引き受けたんです。本当にびっくりすることや面白いことがいっぱいありました。現実の子どもを見たときに、私には80人ぐらいの子ども一人一人の生活がすぐに分かるわけではありませなし、子ども同士の関係が分かるわけではないんです。でもね、ものすごく助かったのは、私がいっぱい知っている本の中の主人公の子どもに、この子は似てるな、次はきっとこの子はこんなふうに振る舞うかもしれない、こんなふうにこの子どもはなるかもしれないと思っっていると、本のようになったりすることなんです。

子どもと子どもが遊んでいます。この子は積み木で遊んでいます。通りがかりの子が、その積み木で遊ぼうと思っって、自分も入れてもらいたいと思っってそばによって一個触ったとたんに、遊んでいた子どもは払いのけます。「ダメ」って。すると「ダメ」って言われた子は、さっきまではいい気分で来たのに、「ダメ」って言われた瞬間に、むかっとしてこの子をバンとたたきます。するとたたかれた子は頭にきちゃって、がぶってかみます。両方がぎゃーって泣き出します。先生が走って行って「どうしたの」って聞きます。どうしたもこうしたも子どもは口で言えませなしよね。子どもたちは二人ともわあわあ泣いています。本当に本に書いてあるんですよ。今みたいに順番を追って言えば、そばにいてなるぞなるぞと思っってじっと見ていると、そのとおりになっっていきます。その時、大人はついどっちが悪いかって思いたくなるわけですよ。最初にこの子が来たときに、この積み木をとらないで、「まぜて」とか「かして」とか「一緒に遊ぼう」とか言えばよかったのに…。

でも、そんなことを子どもに言ったって無理ですよ。子どもの気持ちはそんなに論理的に整理できるわけではありません。一緒に遊びたい、面白そう。ぼくも、そのときこの子は入れてあげたらよかったのに、入れてあげないで、じゃますんな、バーンって…。この子にしてみたら今せっかくここまでできたのに、ぼくは、これをここに載せようとしたのに、何でおまえが載せるんだよう、バーンって…。よく考えると二人の気持ちが手に取るようにわかるけど、どっちが正しいとか悪いとかいう問題ではないんです。二人を前にして、「どっちが悪いの、二人とも悪かったんだからお互いにごめんなさい言いなさい」と大人はつい言いたくなるのですけど、それはダメなんです。ほっておく。泣いているのをほっておく。ほっておいてそばで見ていると、後から来た子は、「のせていい？」って自分で言うんですよ。この子もいとも簡単に「いいよ。」って、二人で急に仲良く遊び始めるんです。そこで大人が出て行って、「どっちが悪いんですか、先に手を出した方はどっちですか」みたいなことを言い出すと、子どもは大混乱になるんです。現場にいるとその混乱ばかりが起きてるわけなんですね。ほっておくと、子どもが自分で自分の気持ちを整理するんです。これは、大人が考えているのと違う風に整理するのですけど、その整理したものを子どもが自分で使ってみる、試してみる。試してみてダメだったら、また試してみる。そうやってやりとりしながら、子どもたちが成長していくのが、本の中にはすごくうまく書いてあるんですね。

これは、スウェーデンの本なんですけど、『だれがおこりんぼう？』、ご存じですか？これね、6冊セットで出ているのですけど、『やんちゃっ子の絵本』っていうんです。ぜひ、子どもに関わってらっしゃる方は、読んでみてください。今、教育の世界でも、スウェーデンやオランダが注目されていますよね。文科省もスウェーデンやオランダの教育を日本の教育に取り入れようとする動きがあるようですね。これは、スウェーデンのお話で、やんちゃっ子第1巻は、『だれのズボン？』です。これは、自我、自分というものを他者と区別する本なんです。これは私のズボン、これはあなたの上着という持ち物を区別する話。すごく簡単なんですけど、小さい人が自分の物と他の人の物がわかること自体、自分と他者を区別することができるようになってきたということなんです。主人公のぶたくまさんととりさんとうさぎさんがズボンを間違えてはいたら変になるんですが、それを取り替えて、みんなうまく自分の物を着て出て行きます。それぞれ違うタイプの3人が、違うタイプの洋服を上手に着ていくという話が第1巻。それで第2巻になると、自分以外に目を向けていきます。自分と密着してるけど他者である母親、お母さんと自分の関係が書いてあります。これも相当面白いんです。よく園児の母親から、「うちの子は、おもしろくて、よくこんなことをするんです」と言われるのですけど、「それ、お母さんそっくりですから」と思うことが多いんです。学校に行っても、だいたい親を見ると、「ああ、やっぱりね」みたいに、先生たちが思われるみたいなんですけど、幼稚園にいるときも同じで本当に面白かったですよ。お母さんの気持ちが子どもにすべて出てくるんです。それからお母さんの口癖もすべて子どもに出てきます。「早くしなさい」なんて、子どもはしょっちゅう言ってますから。お母さん方は、家でしょっちゅう「早くしなさい」って言ってるんだと思います。

幼稚園での出来事です。ある女の子が、朝からすっごい不機嫌だったんです。八つ当たりと言うか、そばを通っただけで人を蹴ったりしてるような機嫌の悪い日だったんですね。とうとう最後はみんな部屋に入ったんだけど、その子は一人で校庭の端っこのところで木を蹴っていたんです。もう本当に荒れまくっていたんですよ。朝からその子は、送ってきたお母さんと離れたくなくて、帰ろうとしたお母さんの足を引きずり、しがみついていたんです。仕方なく、お母さんはひっぺがして帰っちゃったんですけどね。お母さんは「普段はそういうことはないのにどうしたんだろうね」って、「もうしょうがないですよ」と言って帰っていきました。その子は、まだ木を蹴っ飛ばして機嫌が悪いので、みんなが教室に入って、しーんとした園庭で私は「ブランコ乗ろうかな」って言って、ブランコに乗ったんです。最初はその子は、「馬鹿じゃないの大人がブランコなんか乗って」って顔をしてたんです。でも私がビュンビュンこいでいるうちに、ちょっといいかもと思って、隣のブランコに乗ってきたんです。しめたと思って「わあ、気持ちいいな空、ほら高いだろう」とこいでいたら、突然その子、「お父さんの馬鹿野郎」と叫んだんです。「お父さんの馬鹿野郎、お父さんの馬鹿野郎、お父さんの馬鹿野郎、お父さんの馬鹿野郎」って。それで私が「お母さんの馬鹿野郎」って言ったら、「お母さんは馬鹿野郎じゃない」って。「お父さんが馬鹿野郎」って言うんです。突然、その子のブランコがゆっくりになって、「昨日、お父さんとお母さんがけんかした」「お母さんが泣いたんよ」って。私は、「そうだったの、それはそれは大変だったね」「Fちゃんはどうしたの」って言ったら、「私、机の下でないとった」って言うんです。それに対して私は「ふーん」、それだけだったんですよ。それで、彼女はポーンとブランコを降りて、教室へ走って行っちゃったんです。お母さんがお迎えに来たとき、「昨日お父さんとけんかしたんだ」って言ったら、「なんで知ってるんです」って聞くから、「Fちゃんが告白した」って言ったんです。実はお父さんは、頭がすごくいいんですけど、怒り出したら手がつけられなくなるんです。だからお母さんは、お父さんに苦勞しているんです。それを見ていたその子は、お母さんが心配で、お母さんと離れたくなかったんです。自分がそばにいなかったらお母さんに何か起きるかもしれない。だからお母さんの足にしがみついても、お母さんを守ろうとした。でもお母さんは幼稚園に私を送って帰ってしまった。この悲しみ、この自分の気持ちをどこに持って行っていいかわからなくて、暴れていたわけです。でもそのことを言ってしまったら少しすっきりして、部屋に入ったらずっと落ちついたままで、お母さんがお迎えに来たときには、普段と同じように、「おかあさん」って走って行きました。でも、そのこと知らなかったら、今日のFちゃんは乱暴で、何が起きたんだろうっと思うだけですよね。

このようなことには、原因があって理由があるのです。でもね、この子なりの大事な理由があるから、この行動は起きているということを知ることは、とても難しいことなんです。それはたまたま一緒にブランコに乗って成功したわけですけど、そう簡単にはいけませんよね。本の中のこの子にとっては、お母さんとの関係がものすごく密接な時期なんです。お母さんが自分と同化しているような感じがしているんですね。お母さんの口癖やお母さんがしていることはすべて良いと思ってます。この人は、お母さんの口癖で、「それはお母さんが決めます。私が決めます」というのをいつも聞かされていて、あるとき使

うわけです。すると、使われたお母さんは、むっとするわけです。「そんな生意気なこと言って、何言ってるの」でも彼女にしてみたら、大好きなお母さんの言葉を使って、自分の主張を通そうとする。お母さんだって、「お母さんが決めます」と言って、私にいろんなことをやって言うじゃないの。私だって、お母さんみたいに「私が決めます」って言ってお母さんみたいになるんですっていうそういう本なんです。母と子ってすごく密着しているんですよ。

『やんちゃっ子の絵本』は、一巻は自我でしょう。二巻はお母さんでしょう。三巻になると親戚に広がります。孫とおばあちゃんの関係なんです。おばあちゃんには、この子以外にも孫がいるわけですから、自分だけが独り占めできるおばあちゃんじゃないわけです。おばあちゃんっていうのは、お母さんと違った意味で受け止め方が、おおらかですよ。この子にとっておばあちゃんは、大好きな存在なんです。何でも自分の言うことを聞いてくれるんです。そこへ自分より一つ年上のいとこがやってきて、この子までおばあちゃんのことを好きになって…、許されん、私のおばあちゃんなのに。ところが、このいとこが、おばあちゃんから「食べちゃだめよ」と言われていた生のクッキーを食べたんです。ばくばく食べて、ゲボが出るわけです。日本であまり題材に使わないものですね。「たいへん！お口からゲボーッだ！」と書いてあるんです。ここのところでもう子どもは「あっ」って出るときの気持ち悪さが分かりますよね。あれは一回やっただけですっごい気持ち悪いですよね。「おくちからゲボーッが…」わあ、それって、すごくいやだろうなって。子どもはすごく共感するわけです。するとこの小ちゃい方もいとこがゲボを出して、「お父さんここに帰りたい」と泣いている気持ちがすごく分かるんですね。おばあちゃんがこのゲボの出たいところをお風呂場に連れて行って、きれいに洗ってくれた後に二人をソファに座らせて本を読んでくれるわけです。そこで、彼女はいとも受け入れるわけです。このこぐまさんにはおばあちゃんがいます。そしていともいますと。おばあちゃんと同じようにいとも受け入れるというのが最後の最後なんですけど。それは、いとこがちょっと年上だったから、いばっていたようだけど、ゲボをはいたことによって、気の毒だなって気持ちが生まれ、そして自分の中に受け入れるんです。この子どもの心の揺れって言うのが、この『だれのおばあちゃん？』なんです。少し子どもの世界が広がりますよね。でもまだこれ、ここは身内です。

次の第4巻は『だれのちがでた?』です。この絵本のすごいところは、この扉に血の雨が降っているんですよ。日本の本じゃ考えられないようなことです。すごいですよね、血の雨。これは、子ども同士で遊んでいるんです。血が出るって



いうのは、子どもの遊びの中では避けさせたいところです。でも血は大事なんです。血が出るからこそ痛いということが、相手にも分かるんですね。ただ叩いただけだったら、何も分からない。でも血が出るって言うのは、自分にとってもわあとなるし、相手から血が出たら同情に値するわけです。この本は、やんちゃっ子たちが集まっています。何をやるんでしょう。木、のこぎり、釘、金槌、すごいですよ。今、何かつくっているようですよ。「ゆびを うたないように きを つけて!」、「わかってますよー!」、大変、ねこさんが足をのこぎりで切っちゃいました。血がびゃーっと出ています。ここは、「これ打たないでね、注意してね」って言ってますけど、こっちで一人で勝手にのこぎりを引いてます。子どもはここを大人が読んでいる間に、こっちも危ないよ、こっちも危ないよ、何も書いてないけど、こっちもって思っています。ページを開けると、足をのこぎりで切っちゃいました。血がビュアーって出ています。これは、子どもの気持ちです。「うわあ!

ちが できましたよ! たくさん ちが できましたよ! とりちゃん ばんそうこう もってきて!」って、「はい」ってみんなでよってたかって、絆創膏を貼って、「だいじょうぶかな?」って。また何か作り始めましたよ。今、絆創膏してますけどね。「あっ! うさぎさんが とりさんを たたいちゃいました!」わざとじゃないですよ。でも、とりさんはこのくちばしで、おさえていたので、バーンって叩かれてしまいました。これ、自損じゃないんですよ。他損。ここが大変なところです。自分でのこぎりで切って血が出たんなら、みんなでよしよしすれば済む話なんですけど、わざとじゃないけど、うさぎが叩いたわけです。こんなときどうしますかね。難しいシチュエーションですよ。血がだらだらでています。くちばしにひびが入ったかもしれません。大変ですよ、ぶたくまさんが手当てをしています。これできっと大丈夫、消毒して包帯でまいて…。でも、このとき大事なものは、叩いた方の気持ちですよ。叩かれた方は、みんなの同情が集まりますが、わざとじゃなく叩いたこのうさぎは、どんな気持ちだろう。どんな風に思っているだろう。これはなかなか私たちには考えられません。むしろこの現場のすごさ、みんな血が出たことに集中してしまって、こっちがわのわざとじゃなく、しかし、このことを引き起こした子の心の中のことには気がつきません。こういうところからいじめが始まったりするわけですね。「誰々ちゃんが叩いたからなんだ」「わざとじゃないんだよ」「うさぎちゃんひどい。うさぎちゃんのせいだよ」「そんなわざとじゃないのに」って言ってもみんな許してくれません。ほらっ、仲間はずれしています。みんなはまた続けました。さあ、そのとき、みなさんだったらどうしますか。このうさぎのやったことはすごいですよね。それは子どもならではの想像力と今までの出来事から学んだことなんです。このうさぎの行

動を嘘じゃないかとか、そんなのいんちきだと思う大人がいるかもしれません。その人は、傷つきやすい子どもの心をわかろうとしていない人だと思います。このうさぎがどんなに一所懸命考えて行動したかを考えてみてください。

さて、たった今、面白い発見がありました。図書館の本です。このページに、ぐちゃぐちゃって落書きがしてあります。本当はしちやいけないことですよ。ですけどね、子どもの落書きには、結構意味があるんです。このページのここに書いてあります。他のページには書いてありません。なぜでしょう。うちの息子が小さい頃、やっぱり動物のものとか魚のものとか、図鑑とかが大好きだったんです。『犬のすべて』って、細かくいろんな犬の種類と説明が書いてある図鑑のような子ども向けの本があるんですけど、その本の中に、すごい落書きがしてあるんです。それを見たとき私は思わず笑いました。お母さん犬は、赤ちゃんにおっぱいをあげますって、書いてあるんです。ところがお母さん犬が寝ぞべっているところにおっぱいが見えてないんです。するとうちの息子は、そこにおっぱいが見えるように描くんですね。文章を読んで、絵がふさわしくないと思ったわけです。あっちこっちにね、そういう文章を読んで絵がふさわしくないところ全部に絵が描き加えられていました。どれだけこの本を熟読したんだと思って笑いましたけど…。子どもが落書きをするのは確かに悪いことです。特に図書館の本はいけません。もし子どもが自分の家の本に落書きをしていたら、それを大事に消さないでとっていた方がよいですよ。そして、なぜ、ここに落書きをしたのかって考えるといいんです。そしたら子どもの気持ちがすごく分かるんです。「賢いうちの子」と思ったりするわけですね。

次は、『やんちゃっ子の絵本』5の『だれがおこりんぼう？』です。二人の子どものけんかが書いてあります。一人で積み木で遊んでいるこぐまさんは、「ほら、あたしのだもん」って言って、ねこさんに貸してあげません。ねこさんは、「ふん こぐまちゃんなんか だいきらい！ もうあそんで あげない！」って、今まで一回も遊んでないですよ。なのに、「もう あそんで あげない」って悪いこと言うんです。するとこぐまさんが、かっとなって持っていた積み木でがんと叩きます。「あっ！ なに するの？」ねこさんが泣いています。「いたいよう」って、泣いただけじゃ済みませんよ。「ねこさんたら なに するの？ かみついちや だめでしょう！」。本当に、かんでいるんですよ。あーあー、こぐまちゃんが泣いています。ほら、ねこさんも泣いています。こっちたんこぶ、こっち血ね。二人はずっと泣いて泣いて、どうやら泣き止んだようですね。もうだいじょうぶ、ねこさんが遊び始めました。「こぐまちゃんも いっしょに あそぼう」「うん、いいよ」一緒にタワーを作ります。「わあ、すごーい！ たかーい！」二人で仲良く遊んでいます。でもここで終わらないところが子どものいいところですよ。「へ、ほら、あっ、こぐまちゃんたら なに するの」、せっかく積んだのをバーンって蹴りました。これでまたけんかになるのかなと思ったら違うんですね。ねこさんも一緒になって蹴っ飛ばしています。でも、あっ大変、ごっつん。

ほらね、こういうことをするとこうなるでしょうって大人は言いたいところですよ。ごつつんってなったときに、ここに至るまで二人は何を学んだかという、「叩いたら痛い、かんだら痛い、どっちも痛い、こんなのしたらあかんよね」と思ったわけですよ。すると二人はごつつんした時、「いたい、いたいよね かわいそう」「うん、そんなにいたくなかったよ だいじょうぶ だいじょうぶ」って。二人は、妙に仲良しになるんです。ここでもし、先生が止めちゃったりすると、「仲良く遊びなさい」ってつい言いたくなりますよね。だから、子どもの心や子どもの行動は、常に未来を見た大人が、「ここで手を出すのか、口を出すのか、止めとくのか、ぎりぎりまで見守れるのか」判断することが大切だと思うんです。どうすればいいか？簡単です。すべて本に書いてあります。だからどんな職業でも子どもに関わる人は、子どもの本を読むべきだと思います。その子どもの本を読むことによって、子どもの心や子どもの行動の一步先を見せてもらえます。この『やんちゃっ子の絵本』は、そういう意味では、子どものことを私たちが一步引いて、本を通して読み取ることができます。それだけではありません。子どもの本は、子ども自身に読んであげると、私たちと捉え方が違うことがわかります。血が出たことを転げ回って喜ぶ子がいて、そこの血が出たところを何回も読んでって言うんですね。大人の感覚だと血が出たところを面白いなんて、なんて子だと思うんですけど、子どもにとっては違います。血が出たことが本に書かれていたら、これを自分のこととして考えた時はすごく嫌なんです。こんなふうにファーって血が出たら痛いだろうなって。でもやっぱりここは楽しんどいて、この後血が出たら大変なことが起きるから、次のところではちゃんと分かるところと、子どもの中に楽しむことと分かって自分自身のものにするこの両方を本の中から取捨していくんです。それを子どもはできるんですよ。大人がいろんなことをするよりも、本を読んでやったら、簡単だと思うんですよ。

これは、『ラチとらいおん』という古い本ですけど、すごくいい本です。暗い部屋に何か取りに行くのも怖い、それなのに大人になったら消防士になりたいとか、いろんなことを考えている弱虫の子、ラチのところの小っちゃいらいおんがやってくる話です。このラチは、大きならいおんのついでに見ながら、こんならいおんがいたらいいなと思うわけなんですよ。そしたら豆みたいに小さならいおんがやって来たんです。さすがのラチも全然怖くなくて、笑っちゃうんです。するとこのらいおんが、「僕は何でもできるんだ、いすも持ち上げられるし、えいやーって。おまえを負かすこともできる。これからは、僕がついてるから大丈夫」と言います。ラチは、らいおんがついているおかげで、自分がちょっと強くなった気持ちになって、今まで怖がってできないことを励まされてできるようになるのです。らいおんのおかげで、できるようになるわけです。ある日、ラチは、いたずらっ子から弱い子を助けてやりました。もちろん、自分のポケットに小さならいおんがいるから僕はできたと思っていたんです。でも、ポケットに手を入れたららいおんがいないのです。走って家に帰ったら、「ラチ君、もう君に僕は必要なくなった。君は一人で頑張れるようになった。僕はもっと僕を必要としてくれるところに行くから」って、手紙が残されていて、らいおんはラチのところから去って行くのです。ラチはその後、自力で

強くなっていくという話なんです。

これも幼稚園での出来事です。入園式の日、泣いてずっとお母さんにしがみついていた男の子がいたんですね。でも次の日ですよ、その子が泣かないで登園してきたんです。その子はね、かばんにらいおんをつけてきたんです。お母さんがその日の夜、これくらいのらいおんをフェルトで作って彼のバッグにつけてくれたんです。その子は来ながらそのらいおんをいじっているわけです。いじりながら来て、お母さんの方を見ないようにしているんです。それからその子はずっと泣かないで園で過ごしたんです。そして一年過ぎたとき、このかばんのらいおんがなくなったんです。お母さんに「らいおんがなくなったんだけど、どうして」って聞いたんです。K君って子だったんですけど、「Kね、もうらいおんはいらないって」「学年が上がったから、もういらない」って家に飾ってあるんですよ。それはお母さんの力なんです。お母さんが、らいおんの本を読んでやって、「あなたにもらいおんがついてるから」と言ったんだと思います。K君はそのらいおんを持って登園してきたんですね。一年間頑張って、「もういらない」と言ったんです。本当にこのラチと一緒にですよ。子どもの成長を親が大事に見守っていて、そこにこの一冊の本があったってことは、素晴らしいことだと思います。その子にとって、『ラチとらいおん』はすごく大事な本だったと思うんですね。

それからもう一つ、やはり園であったことなんです。幼稚園に双子が入園してきたんです。この双子は三歳。弟は体が大きくて強いんです。兄は小さくて弱いんです。でも感慨深いのは、小さいお兄ちゃんの方で、弟の方はすぐに手と足と口が出るんです。実は、この双子は、一人の女子を取り合っていました。ある日の朝、弟は、その女の子が登園してきたとたんに抱きかかえ、教室の後ろにあるソファに誘導しました。三歳ですよ。弟はクラスで一番大きくて、その取り合っている女の子は小さい子だったんです。抱きかかえて連れて行った時、いすの上でバタンと転びました。女の子は下になってその子は上に乗って二人とももがいていました。先生がそれをつまみ上げて、「何してるの」と言うと、また弟は怒りました。お兄ちゃんもその子が好きなので、そばにいたいんだけど、弟からすごくにらまれて、あまりそばに寄れないわけなんです。そのお兄ちゃんの方は、実は心が優しくて、登園するのは結構難しくて、最初はぬいぐるみを持ってきていました。でも、他にぬいぐるみを持ってきいる人は誰もいなかったの、二日目でそのぬいぐるみを止めたんです。けど、すごく不安でならないのね、だから、常に大胆な弟のそばにいて、弟を自分の隠れ蓑みたいにしていたんです。ところが、この女の子がどう考えても弟よりもそのおとなしいお兄ちゃんの方に常に行くわけですよ。弟は頭にくるわけね。ある日、その女の子の見ていた前で弟がお兄ちゃんをバンと突き倒して泣かしたんですよ。どうなるか見ていたら、うーって泣いてるお兄ちゃんに女の子が、「大丈夫」って駆け寄ったわけですよ。そのときの子どもの気持ちが分かりますか。弟は、突き飛ばして俺は強いんだという気分だったわけです。どうだってその子を見たら、その子は自分の方を見てなくて、倒れたお兄ちゃんの方に駆け寄って、「大丈夫」って言ったわけですよ。ぼくはせっかく強

いところを見せたのに…と、その顔が面白かったんです。

そういうことがあって、ある日のことお母さんが、「先生、どうしましょう」って。お母さんは、いつも一冊の本を二人に同時に読んであげているんですが、『スーホの白い馬』を読み始めたら、途中で強い弟の方が泣くんですって。そして、「止めて」って言うんです。それから先に読めないんですって。ところが、兄ちゃんの方は、「早く読んで、早く読んで」って。「どうしたらよいのでしょうか」って。ご存じですよ、このお話。赤羽末吉さんが絵を描いて、大塚雄三さんがモンゴルの民話を再話したんです。この雄大なモンゴル平原の絵が素晴らしくて、赤羽さんはこれで賞をもらわれます。中国の北の方、モンゴルには広い草原が広がり、そこに住む人たちは、昔から羊や牛や馬などを飼っていました。このモンゴルに馬頭琴という楽器があります。楽器の一番上が馬の形をしているので馬頭琴と呼ばれているのです。けれど、どうしてこういう楽器ができたのでしょうか。それにはこんな話があるのです。モンゴルの草原にスーホって貧しい羊飼いの少年がいたんです。両親がはやくなくなって、おばあちゃんが一人でスーホを育てています。スーホはだんだん大きくなります。歌がうまくて他の羊飼いたちに頼まれて、歌を歌うぐらい上手だったんです。スーホの声はすごく遠くまで響きます。ある日のこと、スーホが夜になっても帰ってこないで、おばあちゃんが心配していたら、夜遅くなったらスーホが白い子馬をつれて帰ってくるんです。馬が草原に一頭で座っていたと。このままだとオオカミに食べられてしまうからと連れてきて、彼はこの子馬を自分の馬にして、大事に大事に育てます。この馬とスーホの間には、素晴らしい友情が育つんです。この馬は、スーホのために、おばあちゃんが飼っている羊を襲いに来たオオカミをたった一頭で傷だらけになりながら追っ払ったりするわけです。しかも、だんだん大きくなって、スーホが青年になった頃、馬も大きくなって、この草原一番の走り手になります。ちょうどその時、遠くの町の王様から、町で競馬の大会を開き、一等になった者には、王様の娘と結婚できるということが知らされます。みんなはスーホに行けと言いました。スーホは町へ出かけていきます。競馬の場所には見物の人たちが大勢集まっていました。台の上には王様がどっしり腰を下ろしていました。隣には、嫁にやるといふ娘も座っています。競馬が始まりました。国じゅうから集まったたくましい若者たちは一斉に革の鞭を振りました。先頭を走っているのは白馬です。スーホの乗った白馬です。「白い馬が一等だぞ、白い馬の乗り手を連れて参れ」と王様が叫びました。ところが連れてきた若者を見ると貧乏な羊飼いでありませんか。そこで王様は娘の婿にする約束など知らんぷりして、「おまえには銀貨三枚をくれてやる。その白い馬をここへ置いてさっさと帰れ」と言いました。スーホはかっとなって夢中で言い返しました。「私は競馬に来たのです。馬を売りに来たものではありません。」「なんだと、いやしい羊飼いのくせに。このわしに逆らうのか。ものどもこいつを打ちの



めせ。」王様が怒鳴り立てると、家来たちが一斉にスーホに飛びかかりました。スーホは大勢に殴られ、蹴飛ばされて気を失ってしまいました。王様は白馬を取り上げると家来たちを引き連れ大いばりで帰って行きました。このページになると弟は泣くそうです。お母さんに止めてって言います。すごく不思議なんです。弟は常に人に乱暴してきました。兄ちゃんを殴っていました。兄ちゃんを突き飛ばしていました。だから実は逆だと思わね。普通は、殴られた方は痛みが分かっていると考えるわけです。でも、殴っていた弟の方が、このページになると「止めて」「乱暴は止めて」「スーホに何でそんなことする」「お母さんもう読まないでこのページ読まないでしめて」って言うんですって。どういう心持ちですかね。いつもやられているお兄ちゃんの方は、「さっさと次を読んで」って言うんです。そしてね、お兄ちゃんが言ったんですって、「いいじゃん、最後は幸せになるんだから」って。結局この白い馬は死んでしまいます。それで馬頭琴を作って、今ではモンゴルのあちこちで馬頭琴が聞こえますっていうふうになるんですけど、死んで人々に幸せをもたらすのです。お兄さんの方はいいじゃん、未来、先というものを見るんですけど、弟はそうじゃなくて、こだわりにこだわって、殴ったり蹴ったりするのはいけないんだと、なぜそんな悪いことするんだと。この話をお母さんから聞いた時には、子どもの気持ちの複雑なところに気づきました。表面的には、すぐに人を殴ったり乱暴したりしてしまう子ですが、実は心の深いところで、いけないと思いつつ手が出てしまう自分自身を常に意識していることを。だからこそ、本に書かれた時に、あーって思うわけですね。私は、そのお母さんに、「子どもをだっこして読むってことは、あなたは大丈夫よっていう気持ちを伝えながら読むことですよ。やってみたらどうですか」って言ったんです。で、お母さんはそれを読む時には、弟をぎゅっとだっこしながらページをめくって、最後まで何回か読んでいるうちに二人とも最後まで聞けるように、本を最後まで読めるようになったんです。やはり、子どもの気持ちは真っ直ぐですね。

それは、人が人と出会うってことだと思うんです。本の中でいろんな人と出会い、そしてお母さんの膝の上で子どもはお母さんに会い、そしてお母さんから「大丈夫」という気持ちをもらって次へ進んでいけるのです。私たちは常にいつも前向きって言うわけにはいきません。だって辛いことや悲しいこと、とても私には無理というようなことが人生の中で何回も来るわけです。私だって何回も来ていました。今もえーみたいなことはいっぱいあります。でもね、そこには小さな隙間が絶対に見つかります。もし、その隙間を自分で見つけられなくても、誰かがここだよって言ってくれる。そのことを私は本を通して子どもに伝えていきたいと思っているんですね。それから本を通して、本を読む人にもそのことを伝えていきたいって思います。だから現実というのは、あらゆる失敗も苦悩もさみしさもあり、最後は自分一人で生きていくというさみしさを抱いて、人間生きていかなきゃいけないと。もうこの年になった方たちはみなさん思っているらっしゃると思うんですね。そのさみしさは、いらないうって言ってもやって来ます。一人去り二人去ります。それから親友と思っていた人に、裏切られることもあるかもしれないし、誰かと一緒にずっと愛し合っていると思ってもそうではないかもしれないし、自分の大事な子どもが、自分と違う道に行くかもしれないし…。様々なことが起きます。そして、友達が一人もいない、

私はひとりぼっちということも体験するかもしれません。でもね、もし一冊の本を開いたらそこに何かがあるかもしれない。

最近出た本の中に、『ジェーンとキツネと私』という本があります。これは、イザベル・アルスノーと言う人が絵を描いてファニー・ブリットという人が文を書いています。中はこのようにコマ割りになっています。文章はあんまりないんですけど、この一つ一つの絵にもすごく深い意味があります。この女の子が私、エレヌです。この私は学校でいじめられています。くさいとか汚いとか、彼女は別にくさいわけでも汚いわけでもないんですけど、子どもの中で、ちょっと頭がよくて美人で先生からいつも認められている女の子たちが、こそこそ悪口を言っている。その悪口がどんどん広がって行って、この女の子をクラス中の子たちが、排除します。エレヌ体重100キロ。そんなことはないですよ。そんな風に落書きがしてあるんです。その下には、臭いとか書いてあるんです。言葉は人をすごく傷つけます。100キロでもない、臭くもないのだけど、書かれた瞬間にその言葉は、刃になってこのエレヌに向かっていくんです。そしてみんなが嘘と知っていながらも、この言葉でエレヌをくるんでいきます。エレヌはどンドンひとりぼっちになります。でも、エレヌは大丈夫なんです。人がそんな風に言っている時に彼女は、本を開きます。これは一つには現実逃避です。私は本は現実逃避でいいと思います。苦しい時悲しい時に、現実から目をそらす。そのそらした後にもう一回別の場所から物事を見るってことができます。このエレヌは、現実から離れる時、『ジェーン・エア』という本を読みます。シャーロット・ブロンテって人が1947年に書いた本なんですけど、そのお話を知っていますか。もしチャンスがあるなら 結構長い小説ですけど読んでみてください。ジェーンはすっごく不幸な子ども時代を児童養護施設で育ち、いろんな苦勞をしながら、先生になるんですね。そしてある家の家庭教師になります。その家庭教師になったところのご主人と恋をします。ご主人と恋をして幸せになるのかなと思ったら、なんとそのご主人には、実は隠された秘密があったんです。奥さんを隠していたのです。ジェーンはそれを知った時に、自分はもうこの人と一緒にいられないと思って、せっかくの幸せを捨てて身を隠すんですね。でもね、ある時気がついたら、この男の人の住んでいる屋敷が火事になったんです。ジェーンは火事に向かって歩き始めるんです。火事ですべて燃えてしまってもう一回やり直しをしようというところで、この話は終わるんですけど…。さあ、その奥さんはいったいどうなったんでしょうね。ただ、このジェーン・エアって人は、不幸のどん底にいても何度も何度も立ち上がるんですね。いろんな方法で立ち上がるんです。そのことをエレヌはこの本を読むことで、自分を励ます糧にしたんだと思います。でも最後は、本という逃避の中ではなく、現実にキャンプに行くんです。みんなからのけ者にされて、あの子とは一緒にグループになりたくないと言われてながらも…。そして、そのキャンプ場でのある出会いによって、彼女が現実の中で救われるかもしれないという予感のする本なんです。こういう子どもの現実に即した本が出ること自体、私はちょっと辛いなという気持ちはあります。でも、この本を読むことで、もしそういう目に遭っている子どもがいた時に、ちょっぴり励まされるかもしれない。一番大きな励ましになるのは、そばにいる大人がその子を本を読める子どもにしてあげておくことだと思うんですね。自分を

励ますというのは、口で言うのは簡単ですが、とんでもなく難しいことです。けど、現実を忘れてこの一時間でも一週間でも別の人生を生きてみるってことができるのは一冊の本があるからですね。これをプレゼントできるのは、子どものそばに今いる私たち大人かなと、そういう風に思っ私はこの仕事を続けているんです。自分を支えていくための何か一冊を持っていると言うことは、すごく大事なことでないでしょうか。

私は父に読んでもらった宮沢賢治や様々な本の中で特に好きだったのは、この『カイロ



団長』という本だったんです。あまり有名ではないと思います。『銀河鉄道の夜』やその他にも賢治にはいっぱい有名な話がありますが、私が好きな『カイロ団長』は、今考えてみたら、お金のあるカイロ団長という大きなガマガエルが、お金も力もなく、ただの小さいチビガエルたちから搾取している話だったんですね。

私は小さい頃から、権力とか、大きい者が小さいものをいじめることに腹が立つというのは、このせいじゃないかと思うんです。大きなカエルのカイロ団長が、小っちゃな子ガエル、何にも知らない子ガエルにドングリの頭いっぱいのお酒を飲ますことによって、お金で縛るわけですね。払えないだろうと借金で縛るわけなんですね。そして働かせるんです。それも意味のない働きです。ただ「この木の根を掘れ」とか、「この石をあっちへ動かせ」とか言うんです。でもね、最後はカイロ団長も同じ目に遭うのです。カイロ団長と小っちゃなカエルたちのやりとりの時に、何でと思っていた自分、何でこんなことが起きるのって思っていた5、6歳くらいの私が今も私の中にあって、どうしてそんなことになってるのと聞きたくなるのです。それは私の今のことを支えている基になってるかもしれないと思うんです。

みなさん、お配りした紙の中に、みんなに対する質問が書いてあります。質問、思い出してください。もし鉛筆があるなら書いてみましょう。みなさんの大好きだった本、今大好きじゃないですよ。小さい頃からずっと好きだった本、小さい頃の好きだった本の名前を思い出しますか。いいですね、みなさん心の中でなんか子ども時代にするするって戻っている感じがしますよ。あーあの本、あーあっちが好きだったかな、その本の名前書いておきましょう。そして、どこが好きだったのかなって考えてみましょう。私はこのカイロ団長の小さなカエルたちがお酒を飲んで酔っ払ってひっくり返るところが好きでした。ばかだなあと思い、でも何でと思いました。何で毎回同じことするよのって。そう思っていたのはたぶん5歳ぐらいでした。みなさんは何歳だったでしょうね。こうやって子どもの頃、好きだった本、あるいは今すごく好きな本、そんな本を思い出したり、それはなぜなのかなあって考えてみたりすると、自分の子ども時代や自分の考えている中心点にひょっ

としたら行き着くかもしれません。

この話で最後になります。河合隼雄さんというユング心理学の先生がおられます。みなさんもお存知ですね。私は河合先生に来ていただいて、二度講演もしていただきました。そしていろんなことを教えていただきました。その河合先生が出された『心の天気図』という本があるんですけど、その中に私がすごく好きなフレーズがあります。「私がいてあなたがいる」もし私がいなければあなたとの関係はないわけです。「私がいてあなたがいる。」これは、自分が中心みたいな言葉なんですね。それは、たった一人の私です。たった一人の私なんだけれど、あなたたちがいなくては生きていけません。一人では生きていけませんということなんですね。これまでいろいろ話をしましたけど、子どもって、本当に口では言えないけれど、顔や態度ですべて丸見えです。私は、山口県内、特に下関では、ほぼすべての小学校に選書会という方法を提案して、自分の学校の図書室の本を子どもが選ぶようにしていただいているんです。でも、その前に私がブックトークするんですね。子どもと本の間が、開きすぎていると本も選べないので、縮めるような話をするんです。その時の子どもの表情が、こうやって私はしゃべっているだけなのに最初のみなさんと同じように、一生懸命に言葉で想像しようとしているんです。その子どもの素晴らしく美しい顔を見せてあげようと思いましたが、時間がないので次にみなさんにお目にかかる時にぜひそれをお見せしたいと思います。今日は聞いていただいてありがとうございました。ぜひ子どもに本を手渡す仕事に携わる人は、子どもと一緒に本を読むこと、そのために自分自身が本を読んで、自分の中の子どもをもう一度、本の中に発見しながら、本を選んでくれたら、すごくいいなと思います。ご清聴ありがとうございました。